

中国映画『トゥヤーの結婚』における「生態移民」の問題  
ー描かれた内モンゴルー  
The Issues of "Ecological Migration" in Inner Mongolia  
Depicted in *Tuya's Marriage*

胡斯楞  
HUSILENG

摘要

After so-called 'environmental policy' was implemented in the west of China, the unfamiliar word "Ecological migration" has become a household word. Usually, the term immigration refers to movement of people to a different region or country, while 'ecological migration' refers to movement of people, caused by the deterioration of ecological situation to preserve and recover the destroyed ecological environment. This means, the activities by the people at the migration origin are regarded as the cause of the environment's destruction. This study focuses on the positive and negative effects of the 'ecological migration' policy portrayed in the movie 'Tuya's Marriage'. Although being designed to recover and preserve environment that had already been destructed, the ecological migration policy causes another damage – the complete destruction of the migrants' culture. How pastoralists can preserve their own culture is the most important issue in today's Inner Mongolian pastoral society.

キーワード 砂漠化 生態移民 牧畜社会 創られた文化

Keyword: desertification, ecological migration, pastoralism, invention of culture

1. はじめに

アラシャ盟は内モンゴル自治区西部に位置し、年間降水量が 150mm 以下で、植生の植覆率が 5 % 以下という厳しい環境である。周辺には山々が広がり、内側はゴビ<sup>1</sup>と砂漠が広がる。バタンジル砂漠、ウランブフ砂漠、テングリ砂漠が全域に広がり、砂漠内には湖、丘陵、平地と砂丘が混在している。総面積が 27 万 244 ㎢で、日本の総面積のおよそ 3 分の 2 に相当する。現在全盟の砂漠化土地面積は 22. 23 万 ㎢であり、アラシャ盟総面積の 82. 3% と内モンゴル内における砂漠土地面積の 25. 6% を占める。さらに、毎年 1000 ㎡の速さで砂漠化が広がっている。このように砂漠が大半を占めるこの地域は典型的な温帯大陸性モンスーン気候に属し、降水量が非常に少ないゆえに風が強く砂埃が多く発生する。人口は 19 万人余りで、1 ㎢あたりの人口密度は 0. 7 人に過ぎないが、人々はこの厳しい自然環境のなかで代々牧畜業を営んでたくましく生きてきた。しかし、近年中国環境政策の一環として「生態移民」（原語「生态移民」）とい

う聞き慣れないキャッチフレーズが徐々に定着してきた。本来「移民」とは、異なる国家や異なる文化地域へ移り住む事象のことであるが、「生態移民」は生態環境破壊の原因になっている牧畜を営んでいる人々を移住させ、破壊された生態環境を回復・保全しようとする政策のことを指す。この政策においては、移住させられる地域の人々は環境破壊の原因であると判断される。実際この政策により、アラシャ盟のエゼネ旗（旗は中国内モンゴル自治区の行政区分で、日本の郡に相当する）では、2001年以降、川辺林の主な植生である胡楊林（ヤナギ科落葉ポプラの木）内で暮らす牧畜民がその家畜とともに、外部へ移動させられた。胡楊林の周りには柵が設置され、放牧は禁止された。こうすることで胡楊林が保護されると考えられたのである。2001年から2003年にかけて人口1500人、家畜10万頭を生態移民させる計画が実施された（図1）。従来、牧地での放牧は家畜が自ら飼料となる草を求めていくが、移住先ではそれができなくなり、畜舎飼育という様式となった。家畜を外に出さず、畜舎の中で家畜飼料により飼育するやり方である。そのため、図1下の2欄にあるように、飼料作物を栽培するのに必要な飼料作物基地電気式ポンプ井戸が経常されているのである。

建設項目	2001年	2002年	2003年	合計
生態移民（人）	500	500	500	1500
家畜（羊単位・頭）				10万
胡楊林の柵設置（ha）	6667	6667	6667	2万
飼料作物基地の建設（ha）	667	1080	920	2667
電気式ポンプ井戸（基）	30	40	40	110

図1 生態移民政策の内容と目標値



図2 アラシャ盟位置図



図3 時内モンゴル自治区行政区画図

本稿でとりあげる映画『トゥヤーの結婚』（原題「図雅的婚事」）は、まさにこの生態移民政策が実施された地域で生じたことを物語る作品である。中心となる家族は、内モンゴル自治区アラシャ盟で牧畜業を営んでいたトゥヤー一家である。二人の幼い子供を抱えて、トゥヤーは懸命に働いていた。夫は井戸掘りの事故で障害を負ってしまったからである。しかし、トゥヤーの体も重労働に耐え切れなくなる。「今後はもう肉体労働はできないですね。長期間の重労働で腰椎がやられてしまっています。このまま行くと下半身不随になってしまう恐れもありますよ。」医者にこう告げられる。「下半身不随」という言葉はトゥヤーの義姉に大きくのしかかった。弟のバートルに続いて義妹もだめになってしまうのか。見かねた義姉は「弟を私が引き取るから離婚しなさい」とトゥヤーに勧める。夫のバートルも同意し、再婚しろと言う。トゥヤーは、一家の苦しい生活状況を思い、しぶしぶ受け入れるものの、「嫁夫養夫」、即ちバートルの面倒もみてくれる人という、再婚条件を出したのであった。

第57回ベルリン国際映画祭で『金熊賞』（グランプリ）に輝いた『トゥヤーの結婚』に関しては、様々な批評や論文が発表されている。例えば、沈小風（2007）<sup>2</sup>は中国辺境地に生きる女性像を分析し、現実味のある中国映画と評している。龐宇（2017）<sup>3</sup>はフェミニズム理論のもと、牧畜生活様式という男性中心の社会背景のなかで、家庭構造が変わったことで女性の自己認識が再確認できたと指摘している。黄珞（2010）<sup>4</sup>と張建国、梅露（2015）<sup>5</sup>は映画に登場させられた馬頭琴と笛から切り込んで、音楽理論を参照しながら、役柄の真実性と複雑性について分析している。また、特に「嫁夫養夫」について、江小林（2007）<sup>6</sup>は民俗学視点からこれが中国歴史上にも存在した慣習であるとしてその可能性について検討するが、一方劉進華（2007）<sup>7</sup>は、現代社会における家庭と婚姻の重要性の観点から、この制度が必然的に失敗することになると主張している。さらにまた、察斯（2010）<sup>8</sup>はこの映画におけるモンゴル族と漢族双方の慣習や、伝統と近代化の問題に着目し、このような映画が誕生したこと自体が両文化衝突の表れであると論じている。

本稿はこうした諸研究を踏まえて映画『トゥヤーの結婚』に描かれた牧畜民の生活の現状とその社会的文脈について考察するものである。先行研究の多くは、この映画が内モンゴル牧畜民の実態を忠実に描き出していると評価しているが、しかし、牧畜民の生活の文化的背景や、苦しい生活状況の社会的背景にまで十分踏み込んでいるようには見えないし、特に、製作側の陣容、脚本・監督・主演のすべてが漢民族で構成されている点も、勘案される必要がある。この映画では確かに、現地の牧畜民が起用され、役の名前も牧畜民の本名が使われている。しかし牧畜民が本名で登場して、それをカメラに収めれば、その社会及び生活実態を忠実に表現できるとは言い切れない。そこに作り手の視線、「他者」の視線が介入していることは明らかだからである。

## 2. 牧畜社会の現実と映像表現

中国では改革開放政策によって東部の沿海地域が急速な経済発展を遂げた。その結果、立ち遅れた西部との格差が広まり、2000 年以降、「西部大開発」のスローガンの下、中国政府が西部に広がる乾燥、半乾燥地域の開発に乗り出した。そうした中で、もっとも問題とされたのは「砂漠化」現象であった。「砂漠化」問題は中国固有の問題ではなく、すでに国際的な関心を集めており、1969 年から激しい干ばつに襲われたサヘル地帯の飢餓を受けて、「国連砂漠化会議（UNCOD）」が開催されてきた。中国においてこの問題が取り上げられるようになったのは、砂嵐が北京や天津をはじめ、中国北方を 13 回も襲った 2000 年頃である。<sup>9</sup> しかも、この砂嵐が日本に到達することも検証されて、日本でも注目をされるようになった。

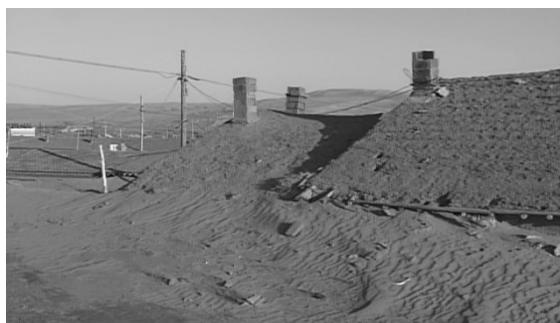


図 4 家屋を埋めた黄砂（2007）



図 5 昼間ライトを照らしながら走る車（2018）

映画『トゥヤーの結婚』の撮影地となったのは内モンゴル自治区アラシャ盟である。かつてこの地区は水や草が豊富で美しい天然牧場が広がっていた。ここ 40 年の間、降水量の減少により河川水が断流（川の水が途中で枯れる現象）し、さらに荒漠草原の保護が十分ではなく、または不合理な開発など人的要因により、砂漠化が進んだ。生態環境は急速に悪化し、砂嵐が頻繁に発生するようになった。図 4 と図 5 で示しているように十年以上経っても何も変わらず毎年砂嵐が吹き荒れている。また、水位が低下し、水質も劣化した。地下水の変化の基準は地下水位と水質の変化であり、この地下水位の低下がアラシャ盟各地で観察されている。

ここ 10 数年、河の水が少なくなった。地下水位も低くなっている。井戸の深さは 3m で十分だったが、7m でも水が出なくなった。ガシヨン<sup>10</sup>が多い（40 代男性、モンゴル牧畜民）<sup>11</sup>

トゥヤーの夫バートルは水不足のこの状況を何とかしようと井戸掘り作業を行った。深く掘らないと水が出ないため、掘っていくうちに固い岩盤に突き当たってしまう。そこで、ダイナマイトを用意した。穴の底にダイナマイトをしかけ導火線に火をつけたら、急いで地上の人に引き上げてもらう。地上に出た後から爆発するよう、導火線の長さも慎重に測らなければならない。地上にいる人もタイミングよく迅速にやってくれないと地上に出る前に爆発し、命を落とす恐れがある。一連の動作は一気呵成に行わなければならない。しかしついに悲劇は起きてし

まう。バートルが地上に出きらないうちにダイナマイトが爆破してしまった。幸い一命はとりとめたものの、歩くことはできなくなってしまった。

井戸掘りは生活そのものである。岩盤に突き当たっても掘り続けることは、生活がどんなに苦しくても希望をもってしぶとく生きようとすることである。事後の生活のすべてはトゥヤー一人の肩にかかることとなる。井戸掘りは中断したため、毎日すべての家事をこなしながら数十キロ往復して水汲みをせざるを得ない。重労働を繰り返す日々が続く。ある日、ついに耐え切れずトゥヤーも倒れてしまう。医師には、今後もう肉体労働は無理だと言われ、このままでは「下半身不随」になってしまうと告げられる。こうして「トゥヤーの結婚」というタイトルの意味が明らかになる。義姉と夫に離婚を勧められたが、バートルの面倒も共にみてくれる人に嫁ぐという条件で、離婚しそして再婚するという決断をしたのである。自分のためではなく家族を守るための戦略的な選択とも言えようが、そうする外なかったのである。離婚して夫はなくなっても、バートルはトゥヤーにとって大切な家族であることには変わりはない。

求婚者が相次いで現れる。しかし誰もがトゥヤーの再婚条件に頭を抱えながら帰って行く。そんな中、トゥヤーの同級生のボリルがやって来た。ボリルは石油事業に成功し、大金持ちになっていた。バートルを一番良い福祉施設で介護させるという条件でトゥヤーに求婚し、承諾を得る。そうしてトゥヤーの一家を自家用乗用車に乗せ、町へと走らせた。



図 6 福祉施設の入り口

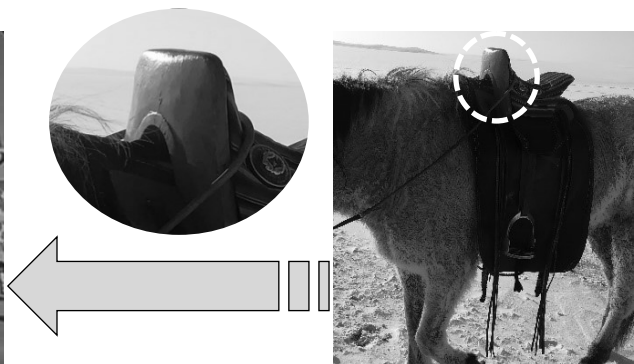


図 7 モンゴル式鞍

一行は、途中でバートルを福祉施設に預けることにした。その入口はモンゴル式鞍の前橋の形になっていた。生態移民政策によって牧畜民が草原から離れていくと、いつも身近で使っていた鞍はこうした建物や絵図でしか見られなくなって来るのだろう。ここには民族文化そのものが消えて去ってしまっているという、大きな問題が垣間見られる。福祉施設の入り口の両側に「伸出我們援助之手 共同建設愛的家園」（私たちの援助の手を差し延べ、皆で愛にあふれた家庭的な施設を造ろう）という看板が張られている。かつて、鞍に跨って凛々しく過ごしていた牧畜民が、今や、鞍の形の下から入って介護を受けるのである。このアイロニカルな描写は、牧畜民が現代社会において弱い立場に置かれ、結局、政府や行政機関の援助を受け、伝統の牧

畜業とその文化を手放せざるを得ない状況に陥っていることを読み取ることもできよう。

バータルは自殺を試み、トゥヤーはボリルと別れ、家族四人、再び草原に戻った。従来の牧畜生活、伝統文化から離れたくない。最後のものがきである。そこには、トゥヤーに光と希望が見える印象的な出来事が描き出される。ある日隣人のセンゲーが家の敷地内で井戸掘りを始めたのだ。そうしてトゥヤーに求婚した。トゥヤーは最初拒否したが、センゲーのアタックが続いた。そのアタックというのは黙々と井戸掘り作業に没頭することだった。その姿にトゥヤーも感動し、求婚を受け入れることになる。錯綜する様々な出来事のなかで、もっとも良いエンディングを迎えたかのように見える。

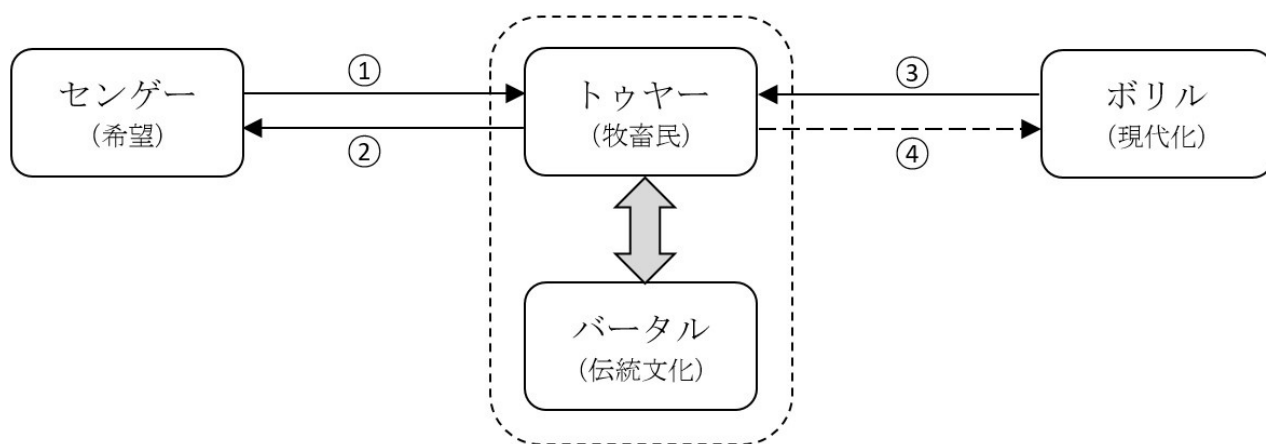


図 8

この映画における人物像はそれぞれ記号化された社会背景を表していると考えることができる。

トゥヤー（牧畜民）：一人の牧畜民として、変わりゆく自然と社会環境のなか、どのような生き方をするのかという選択に迫られている。環境悪化のなか「生態移民」を余儀なくされた牧畜民の人物像と捉えることができる。

バータル（伝統文化）：昔、モンゴルの伝統祭ナードムにおいて有名なブフ（モンゴル相撲）の選手であり、男の中の男で、だれにも羨まれる存在であった。まさに内モンゴルの伝統文化の象徴ともいえる人物である。後に障害を負って身動きが取れない状態に陥り、そこから完全に受動的な状態となり、自ら選択するという権利は消えてしまった。

ボリル（現代化）：ボリルは外の世界に出て、視野を広げた人物である。現代技術を駆使した重機などを使い、石油を堀削し、豊かな生活を手に入れた。移動の足もセダン車で、トゥヤー一家を連れて出して都会へと疾走する姿はまるで牧畜民と草原を引き離そうとする現代化の歯車のように見て取れる。

センゲー（希望）：トゥヤーと結婚すると同時にバータルの面倒も見てくれる。牧畜民が草原

から離れることなく、引き続き従来の伝統生活を続けられるという条件をつくってくれた人物であり、トゥヤー一家は期待に胸を膨らませる。まさに窮地に立たされた時の希望である。

以上のような類型理解に立つと、それぞれの人物像の言動から社会の動きがいつそうよく見えてくる。図8の③は、現代化の歩みが辺境地である草原にまでたどり着いて、牧畜民に選択を迫っている。ボリルはトゥヤーの条件をすべて受け入れることができなかった（バータルを福祉施設に入れる）のは、現代化の進みは従来の伝統文化にある程度の配慮はするが、牧畜民とその伝統文化は共存し続けることはできないことを意味する。④は、伝統生活を手放せざるを得ない状況になってしまったが、それは本心の表れではない。トゥヤーとバータルの関係は引き離せない一体であり、牧畜民と草原の伝統文化、どれかが欠けても内モンゴル牧畜社会の歴史は成り立たないことと同様である。①は、その中でセングーは唯一の希望を持たせる存在として登場している。②は、牧畜民は「希望」に期待を膨らませ、この苦しい生活を早く終わることを願う。

再び草原に戻った後、セングーはトゥヤーの敷地に井戸を掘る作業に没頭する。しかしまたしてもバータルと同じような事件にあってしまう。作業中、地上に出きらないうちにダイナマイが爆破し、気絶してしまったのである。奇跡的に、命や身体に別条はなかったが、これからは掘り続けるとどんな結果が待ち受けているか誰も知らない。希望は見えただものの、やはり伝統牧畜生活は復活できないだろうというメッセージを読み取ることができよう。

### 3. 生態移民の問題

頻繁に発生する黄砂の襲来が年々勢いを増す中、中国政府は、西部辺境地における環境荒廃の主要因は「牧畜民による過放牧」と断定した。植生の劣化や砂漠化が激しい地域を「重点保全対象地区」に指定して、その中で家畜の放牧行為を停止させる方針を取った。それは牧畜民たちを移動させ、彼らの営んで来た伝統的な牧畜業を実質的に放棄させることを意味する。初めは、「禁牧」（一定期間の放牧禁止）・「休牧」（牧草が結実するまでの期間の放牧停止）政策をとっていたが、効果が薄く、その後は「生態移民」政策に乗り出したのである。牧畜文化を捨てたモンゴル人が、果たして、都市での定住に馴染み、安定的で継続的な生活を送れるのか。

トゥヤー一家が再び草原に戻ったのは牧畜民の最後のもがきに過ぎず、本来はそのままトゥヤーがボリルと都会へ行き、バータルが施設で介護を受けるのがむしろ現実に近いものであろう。ボリルがトゥヤー一家を都会へと連れて行った時、途中で泊まったホテルでこんなシーンがある。ホテルのテレビには一面緑の草原で競馬する人々の姿が映し出されている。同じ頃、福祉施設でバータルの部屋のテレビも同じ画面であり、馬を駆使して疾走する男たちの雄姿が映っている。番組の内容は、故郷が砂漠化してやむを得ず離れていくトゥヤーとバータルのような状況とは正反対のものだった。それはトゥヤーとバータルにとって何を意味するのか。ト

ウヤールとバートルは二人ともテレビの方に目を向けてはいなかった。テレビが映し出しているような美しい草原で、馬に乗って自由奔放に走ることは、この二人にとって昔の思い出でもあり、将来の憧れでもあるはずである。二人が離れ離れになっていく時点でこのシーンが登場する時、それは現実社会への風刺画と言えるかもしれない。

ところで、映画において、トゥヤールがバートルと離婚した後、求婚者が相次いで現れて来る。最初の求婚者は馬に乗った四人組だった。その後には、バイクや車などで訪れてくる者もあった。ここで、求婚者の移動手段の違いと中国語の発音の違いの関連性は興味深い。

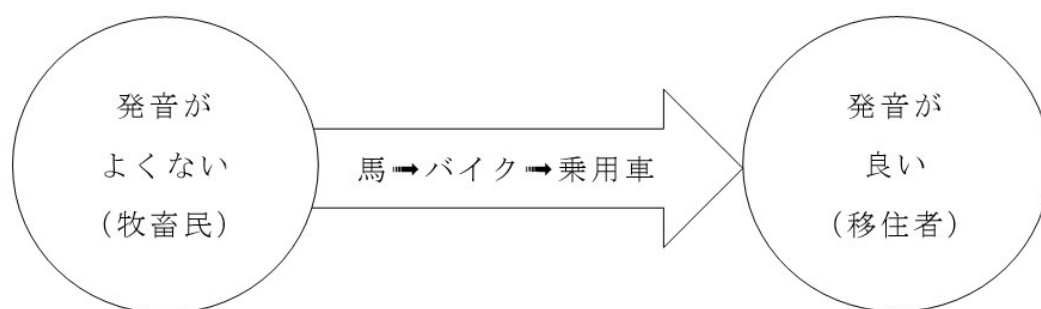


図 9

移動手段がよりバージョンアップしていくにつれ中国語の発音も徐々によくなっているのである。中国語を上手に喋れることは中国語圏（都会）によく馴染んでいるということであろう。馬を駆使する人たちの中国語は片言である。つまり、この人たちがまだ草原生活をしているということであろう。乗用車のハンドルを握る人は今後馬を駆使する機会が極めて低くなる。これは伝統文化から徐々に離れていっていることを意味しているといえよう。言い換えれば、都会へ移ることによって民族の重要な特徴である言語、それから従来の伝統文化が失われていくということである。生態移民させられた牧畜民は、都市定住とともに、本来の牧畜文化を犠牲にせざるを得なくなっているのである。

生態移民政策は強制的であったものの、計画通りには進まなかった。図 1 にあるように、エゼネ旗では 2001 年から 2003 年にかけて、生態移民 1500 人を移住させるという目標値は、2004 年 12 月までにわずか 3 分の 1 しか達成できていない。当初の移住政策は、2003 年までと計画されたが、延長されることになった。

転入地	2002 年	2003 年	2004 年	合計
人民政府所在地郊外の移民村	146	14	235	395
各ソム内の移民村	0	0	94	94
馬鬃山地域	19	0	0	19
合計	165	14	329	508

図 10

なぜこのようことが起きるのか。それは、先に移住した人々の失敗例が相次いだことも一つの原因だと考えられる。家畜は長距離移動後、その土地に慣れないということもある。病気や不妊現象も起こりうる。また畜舎飼育における問題は、家畜飼料を如何にして整えるかにある。飼料作物の栽培と転出転入に費用が嵩む。その費用を補うために家畜を売り払ったりして何とかしようとするが、全体的にみると移住前と比べて収入が大幅に減少し、生活が苦しくなったという事例は少なくなかった。移住先で分配された飼料作物基地は、限られた頭数の家畜飼料しか生産できない。つまり、家畜頭数を増やすことはできないということである。そうすると、家畜が増えないのに、飼料などで支出だけが増えるという悪循環に陥り、生活はますます苦しくなる。家畜飼育だけだと収入が低下するため、臨時雇いや食堂経営などに生業を転換する人も出てくる。住み慣れた土地から離れたくないと、生態移民政策を拒む牧畜民もいれば、こうした移住先での失敗を耳にして、移住を躊躇する人も少なくない。しかし、政策実施時期は延長されて、エゼネ旗の 2001 年の計画は 2005 年にほぼ達成されたのである。児玉（2012）は、「生態移民政策は貧困をまねく」と述べ、「情報の非公開（牧畜民への補助金の内訳や土地利用の説明など）、移住による居住環境の悪化とコミュニティの破壊、禁牧による人と家畜の関係の破壊」といった、新たな問題も指摘している。移住計画が達成されても、移住後の問題はたくさんあり、その解決策を求めていく必要がある。

#### 4. 「創られた」牧畜社会

多くの批評において、『トゥヤーの結婚』は内モンゴル西部の牧畜民の生活を忠実に描き出したと高く評価されている。この映画で役者となったのは、トゥヤーを演じたプロの俳優を除けば、全員、現地の牧畜民である。素朴な牧畜民の出演により、モンゴル族特有の風景がある程度味わわれることは間違いないが、しかし、映画が、全体として、現実の生活をどこまで正確に映し出そうとしているのか、見極める必要がある。

この映画の脚本を手掛けた蘆葦（ルー・ウェイ）は、2016 年 4 月 18 に北京大学美学と美育研究センターに開かれた「美学散歩文化サロン」（雑談会）において、『トゥヤーの結婚』について次のように述べている。

『図雅的婚事』是一个發生在四川的事实的「嫁夫养夫」的故事。（中略）在听到内蒙古長調的時候、突發灵感、為什麼不拍一个内蒙古的故事呢？于是萌生了把整个故事移植到内蒙古草原牧民的生活中的想法。可是這樣的故事在内蒙古的牧民生活中有可能發生嗎？經過調查發見、這樣的情形在牧民家庭也時有發生、当自己的丈夫喪失生存能力的時候允許第三者介入。<sup>12</sup>

『トゥヤーの結婚』は四川省に起きた本当にあった話です。（中略）内モンゴルのオルティンドー（モン

ゴル語で「長い歌」という意味の民謡、中国語で「長調」と表記する）を聴いた時、ふとこの物語を内モンゴル草原牧畜民の生活の中に取り入れて撮影しようと思ったのです。しかし、このような出来事は内モンゴルの牧畜民生活の中で起こりえるのだろうか？調査の結果、このような出来事は牧畜民家庭でよくあり、自分の夫が生活力を失った時第三者の介入が許されることがわかりました。（筆者訳）

四川省で「本当にあった」出来事を、内モンゴルの民謡を聴いた時に、内モンゴル草原の牧畜民生活の中に転化してみようとしたというのである。監督となったのは、蘆葦と昔からの知り合いの王全安である。彼は映画のロケ地を選んだ理由について、次のように語っている。

我的母親就出生在離這次拍攝地很近的地方。我一直喜歡那个地方的蒙古人、喜歡他們的生活方式和音樂。当我听说这个地方因粗暴的工業開發導致草場嚴重沙漠化、当地政府強令当地的蒙古牧民搬離牧区時、就決定在那一切消失之前、拍攝一部電影來記錄這一切。<sup>13</sup>

私の母親は今回のロケ地の近くで生まれました。私はその地方のモンゴル人が好きで、彼らの生活様式と音楽も好きです。しかし、この地方は乱暴な工業開発にさらされ、牧地の砂漠化が激しく進みました。現地政府が牧畜民を強制的に転出させると聞いた時、一本の映画を撮り、ここにあるすべてを記録しようと決めました。（筆者訳）

蘆葦はまた「好的電影是大家相信的電影、坏的電影是大家不相信的、這就是電影好壞的區別。」<sup>14</sup>（良い映画というのは皆が信じる映画、よくない映画は皆も信じない、これは映画の良し悪しの区別である）とも発言している。蘆葦は「良い」作品を作りあげてを心掛け、王全安は現代社会の動きを記録しようと決意している。二人とも『トゥヤーの結婚』の製作に情熱を傾け、その共同作業によって、環境の悪化により草原での牧畜生活ができなくなったトゥヤー一家の葛藤と躊躇が巧みに描き出され、ベルリン国際映画祭にてグランプリ受賞したのが証拠立てるように、国内外の多くの観客がこの物語に心を打たれたのである。

しかし、この映画の出資者である王楽（西安影視制作会社）、プロデュースした巩徳順（陝西人民代表大會常務委員會）、脚本の蘆葦、監督の王全安、主演の余男（トゥヤーを演じた俳優）、制作陣はすべて漢民族であった。そこで、漢民族制作陣が制作した内モンゴル牧畜社会を舞台にした映画という視点から改めて考察してみると、描かれた内モンゴル社会と実際の草原牧畜社会との間には、次のような三つの点で相違が生じていることが明らかになる。

1）民族言語の使用を放棄したことで、現実社会を忠実に表現できてない。映画全編が中国語の台詞で制作されている。トゥヤーを演じたプロの俳優の流暢な台詞を除いて、ほかの素人俳優は片言の中国語で会話しており、とても不自然である。実際、モンゴル語を母語とする牧畜民の二人が、二人だけで話し合う時に、あまりできない中国語で会話する理由はない。中国

語を理解できない牧畜民は筆者の故郷にも大勢いる。中国には中国語を話さない、話せない中国人がいることが見落とされ、それは先行研究でも触れられていない。吹き替え映画ではないので、この地（少なくとも映画ロケ地のアラシャ盟）の牧畜民の使用言語が中国語であるというイメージが観客に強く与えられてしまう。

2) バータルは数多くあるモンゴル族伝統楽器のどれかでなく、漢族の伝統楽器の笛を用いている。これも監督の無意識的な指示の表れであろう。漢族視聴者はモンゴル族特有の楽器の演奏を聞く時、その楽器の情報と音を収集し消化するのに特別な頭の働きを強要されるが、中国語の台詞と、新石器時代からとも言われる、中国の歴史ある楽器の音色を耳にする時は、隔たりなくスッと入ってくるという利便性がある。

3) 脚本を担当した蘆葦は「調査の結果」、「嫁夫養夫」現象が牧畜民家庭でよくあることだと語っているが、何処でどのような調査したのであるだろうか。仮にそうだとしたら、四川省でも内モンゴルでもふつうに見られる現象であり、人々の興味を引けず、わざわざ映画で強調する価値はないことになってしまおう。映画の中で、トゥヤーとセンゲーが結婚式を行う際、バータルとセンゲーは激しく殴り合っている。これはまさに、牧畜民が「嫁夫養夫」のことを心からは受け入れてないという反証になるのではないであろうか。

このように、たとえ現地牧畜民の出演でストーリーの信憑性が増したとしても、それは現実そのままではなく、やはりそれは「創られた」牧畜社会像であると言わなければならない。これは脚本家と監督が意図的に事実と異なる映像を撮ったということではなく、むしろ、彼らの内モンゴル牧畜社会に対する理解と認識が無意識的に働いたと考えられる。かつて、エドワード・W・サイードは「オリエントとは、むしろヨーロッパ人の頭のなかでつくり出されたものであり、古来、ロマンスやエキゾチックな生きもの、纏綿たる心象や風景、珍しい体験談などの舞台であった」<sup>15</sup>と述べた。こうしたオリエンタリスト的眼差しは、この映画製作の場合にも認められるのである。

## 5. おわりに

『トゥヤーの結婚』では、トゥヤーの家だけが広大な大地で孤独に建つ。隣人のセンゲーの家も登場しない。遊牧生活が姿を消し、定住が進んだ今日においてそれほど家屋が少ないということは、みんなどこかに行ってしまったことの表れだと考えられる。次世代の担い手はまさしく映画に映るトゥヤーの子供のようなまだ幼い子たちである。近年内モンゴルでは、子供が将来どのように生きて欲しいかという親の願いを、子供の名前に込めることが多い。トゥヤーの二人の子供は、兄が「Zayaa」であり、妹は「Boroo」である。「Zayaa」とはモンゴル語で「運命」という意味であるが、名前で使われる場合には「良き運に恵まれますように」という意味が含まれている。良き運に恵まれて良き生活ができるようにとトゥヤーとバータルは願ってい

る。人々が良き生活をして、幸せになるということは、その地域も豊かで、発展を遂げていることである。しかし、実際はそうはいかなかった。妹の名前はより現実的で、「Boroo」とはモンゴル語で「雨」を意味する。「雨だけは舞い降りて欲しい。」これは「水源を求める」祈願の表れとであろう。兄弟二人の年齢はさほど離れてないが、この二つの名前から見えてくるのは、短時間に生活が苦しくなったということである。「Zayaa」にはまだ将来の希望が見える。しかし、「Boroo」には、もう目の前のことだけで精一杯で、将来を考える余裕がなくなったと切羽詰まった苦しさがひしひしと感じられる。

この映画に出演した人々はすでに都会に引っ越したという。内モンゴルにおいて生態移民政策は 2000 年から始まり、アラシャ盟だけでなく、シリングル盟などほかの地域でも実施されたが、本稿で例として挙げたアラシャ盟においては、この政策の完了後も、環境回復は実現できてなかったのである。「創られた」牧畜社会と同様、生態移民政策も牧畜社会の社会環境、自然環境、環境との因果関係について十分検討できていなかったかもしれない。環境保全だけを重視したが、文化の保全ができず、新たな問題が生じた。「生態移民」は人の移動に伴った文化の移動でもある。今まで草原という開放的な環境で生まれ、保たれてきた「文化」が都市の密集空間で生まれた「文化」を前にどのような形で生き残れるかがもっとも注目すべき問題である。

## 注

- 1 ゴビ (Govi) はモンゴル語で、中国では「戈壁」の当て字で表す。植物がまばらに生えた砂礫が広がるステップのことである。
- 2 沈小風「《図雅的婚事》回帰現実的の另一種可能」『電影文学』10 (2007) : 52-53 頁
- 3 龐宇「女性主義視角下的《図雅的婚事》」『戲劇之家』14 (2017) : 128 頁
- 4 黄珞「馬頭琴下訴說艱澀与幸福一簡評《図雅的婚事》」『小説評論』第二期 (2010) : 190-192 頁
- 5 張建国、梅露「真实的笛声真实的力量—評電影《図雅的婚事》的后现代表现手段」『電影評価』22 (2007) : 51 頁
- 6 江小林「婚俗与日常生活：民俗学的一个文化視野—電影《図雅的婚事》的文化解讀」『電影評価』20 (2007) : 40 頁
- 7 劉進華「《図雅的婚事》：解不開的“家庭論理”結」『遼寧教育行政学院学报』24.7 (2007) : 112-113 頁
- 8 察斯「《図雅的婚事》：文化衝突下民族電影的抉択」『文化縱横』12 (2010) : 132-133 頁
- 9 児玉香菜子『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的変容』

名古屋大学文学研究科比較人文学研究室（2012）：5－6 頁

- 10 「ガション」はモンゴル語で苦い、塩辛いという意味である。「ガション」になった水を飲用すると下痢になるため、人間の飲用には適さない。降水量の減少と同様に、地下水位の低下と水質悪化の原因は河川水の減少にあると認識されている。
- 11 児玉香菜子『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的変容』名古屋大学文学研究科比較人文学研究室（2012）：123 頁
- 12 顧春芳「中国電影与人文精神」『中国文化報』、2016 年 5 月 24 日：3 頁
- 13 察斯「《図雅的婚事》：文化衝突下民族電影的抉択」『文化縦横』12（2010）：132 頁
- 14 顧春芳「中国電影与人文精神」『中国文化報』、2016 年 5 月 24 日：3 頁
- 15 エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』（上）平凡社（2015）：17 頁

### 引用文献

児玉香菜子『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的変容』、名古屋大学文学研究科比較人文学研究室、2012 年  
小長谷有紀、シンジルト、中尾正義『中国の環境政策 生態移民——緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？』、昭和堂、2007 年  
顧春芳「中国電影与人文精神」『中国文化報』、2016 年 5 月 24 日  
察斯「《図雅的婚事》：文化衝突下民族電影的抉択」『文化縦横』、2010 年 12 期  
DVD『トゥヤーの結婚』、ワコー+マクザム、2006 年

### 図の出典

- 図 1 児玉香菜子『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的変容』名古屋大学文学研究科比較人文学研究室（2012）：191 頁
- 図 2 児玉香菜子『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的変容』名古屋大学文学研究科比較人文学研究室（2012）：113 頁
- 図 3 ボルジギン・ブレンサイン編著『内モンゴルを知るための 60 章』明石書店（2015）
- 図 4 テレビ朝日・日経映像『素敵な宇宙船地球号 #475』放送日 2007 年 4 月 29 日
- 図 5 内モンゴルシリングル盟にて筆者が撮影 2018 年 4 月
- 図 6 DVD『トゥヤーの結婚』、ワコー+マクザム（2006）
- 図 7 内モンゴル赤峰市にて筆者撮影

図 8 筆者作成

図 9 筆者作成

図 10 児玉香菜子『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的变化容』名古屋大学文学研究科比較人文学研究室（2012）：197 頁